

兵庫県出石地方陶石鉱床第二次調査報告

塚脇祐次* 尾崎次男**

Résumé

Second Report on the Pottery Stone Deposit at Izushi

by

Yūji Tsukawaki & Tsuguo Ozaki

The writers investigated the Nakamura Mine which situated at the northwestern part of so-called "Izushi pottery Stone District".

The Nakamura mine comprises three deposits, namely Karatsu-dani, Chimyojin and Keioji, the former being promising while the latter two hopeless.

Karatsu-dani deposit shows E-W elongation, and crosses approximately perpendicular to the main vein which called "the 1st main vein" in this districts in the former paper.¹⁾

The width of this deposit reaches 50-55 m, and its reserves are amounted to 1,380,000 tons. By observation of the outcrops, quality of this deposit belongs to "3rd class stone", the grade of ore may be predicted to be higher as the depth increases.

要 約

この調査は、昭和23年7月大阪支所の浜野・塚脇および尾崎によつて行われた出石陶石調査に引き続いて、昭和25年9月に実施されたものであつて、中村鉱山に属する唐津谷・知妙院および経応寺鉱床の概査を主目的とした。

今回調査した鉱床中、もつとも囑望し得られる唐津谷鉱体でも鉱石の品質は「3等石」程度であつて、知妙院および経応寺鉱床は鉱石の品質はもちろん、鉱量の点においても唐津谷鉱床に劣る。

1. 緒 言

昭和25年9月兵庫県出石郡出石町附近に胚胎する陶石鉱石鉱床の調査を実施した。

今回の調査は去る昭和23年7月当大阪支所浜野・塚脇および尾崎によつて行われた鶏塚・柿谷・日ノ辺および桐野の各陶石鉱床調査に引き続いて、中村鉱山を主体として実施したものである。ここにその成果を報告する。

なお、調査担当は次の如くである。

* 大阪駐在員事務所 ** 技術部

1) Izushi Pottery Stone Deposits surveyed on 1948, by K. Hamano, M. Ueno and the present writers.

地質および鉱床調査 塚脇祐次
地形測量 尾崎次男

2. 位置および交通

今回調査した中村鉱床は兵庫県出石郡出石町および室塚村に跨り、出石町の東方1kmの所に位置している。

出石町に至る経路は山陰本線豊岡駅・江原駅および八鹿駅から、それぞれ15.4km・12kmおよび13kmの距離にあつて、その間はいずれも県道が発達しており、乗合自動車に通じている。

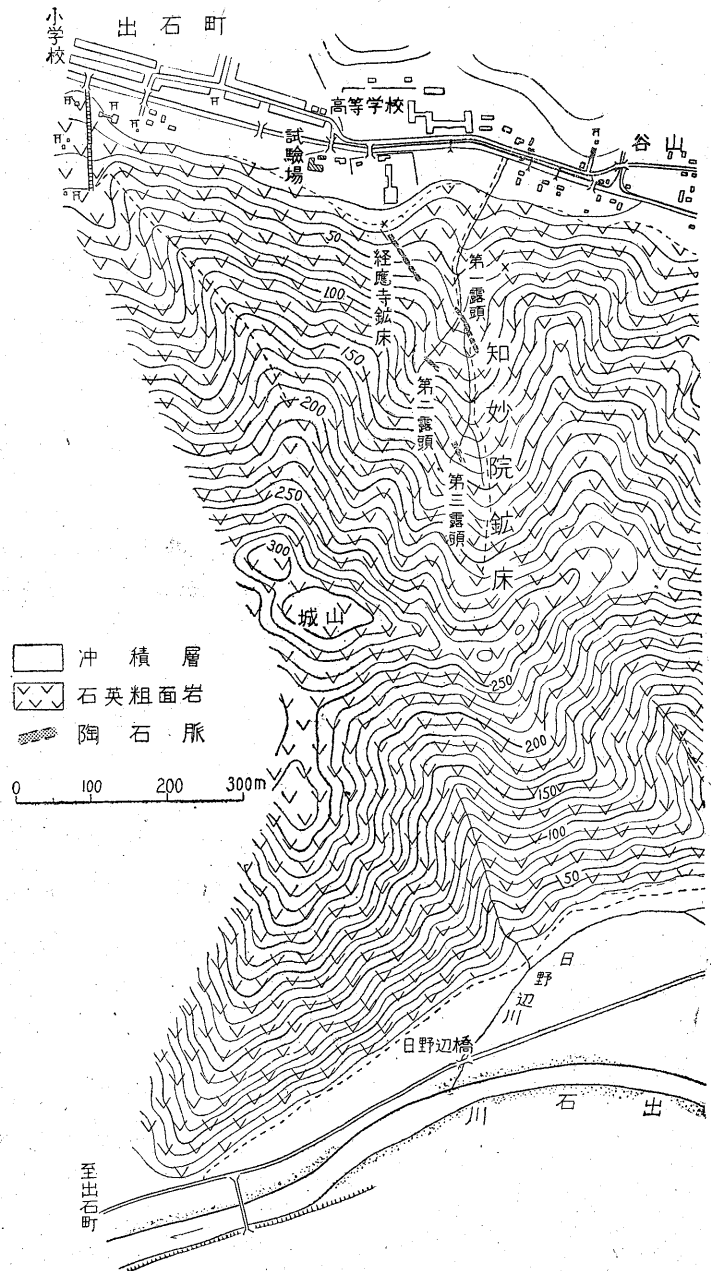
3. 地 形

調査地域はやや峻嶒な幼年期の地形を呈し、地域のほぼ中央部に城山(海拔標高321.5m)が聳えている。

4. 地 質

地質は主として石英粗面岩からなつており、出石川および谷山川の流域の氾濫原に僅かに沖積層がみられる。

石英粗面岩は外觀やや褐色味を帯びた白色を呈し、斑晶としては肉眼にて、石英・正長石・斜長石・黒雲母が認められ、黒雲母石英粗面岩に属するものである。検鏡下では一般に石英・灰曹長石・正長石・黒雲母の斑晶と隠微晶質の石基からなり、多くの場合熱水液の影響をうけて多少の絹雲母が生じている。



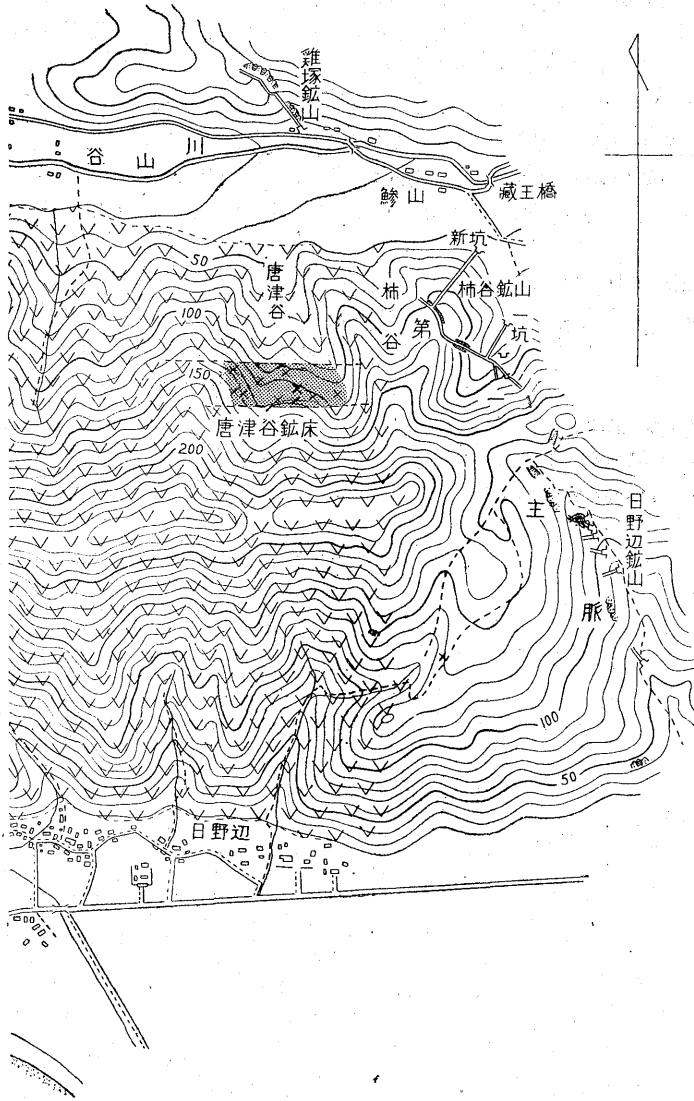
第一図 出石陶石鉦山附近地形および地質

5. 鉦 床

今回調査した中村鉦山の陶石鉦床は、唐津谷・知妙院および経應寺の6鉦床からなっている。

5.1 唐津谷鉦床

本鉦床は大規模な探鉦を実施した上でないと、その全貌を明らかにすることはできないが、今回の短期間の概査にて知り得たことは次の如くである。すなわち本鉦床



鉱床図(縮尺 1: 10,000)

は走向ほぼ東西に走り、昭和23年調査の際命名した「第1主脈」にはほぼ直交したもので、その脈巾は当地方の他の陶石鉱床に比較して極めて大きく、50~55m程度のものと推定される。品質は露頭部のみの観察では、第1主

脈の3等石程度あるいはそれ以下のものであるが、深部に進むに従って品質が向上することが予測され、今後当鉱床の脈巾確認およびその品質の試験を実施することによって、将来に大きな期待がもたれるものと予測される。

5. 2 知妙院鉱床

本鉱床には地質鉱床図に示したように、知妙院第一・第二・第三露頭の3露頭がある。露頭部分のみの観察について記載すれば、次のようである。

知妙院第一露頭は走向 N 20°W に走り傾斜はほぼ垂直である。陶石は鉄分多く赤褐色を呈し、脈巾 2 m 内外である。

知妙院第二露頭は走向 N 50°W に走り、粗粒であつて、わずかに陶石化作用を蒙つたのみである。

知妙院第三露頭は走向 N 30°W に走り、脈巾 4 ~ 5 m で、前記第一・第二両露頭に較べて良質であるが、唐津谷鉱床のものに較べると劣り、陶石として使用困難と考えられる。

すなわち露頭部分の観察では品質が余り良好でなく、稼行の価値を認め難いが、一応深部掘鑿の上品質試験を実施する必要がある。

5. 3 経応寺鉱床

本鉱床は露頭部から S 15° E の方向に鑿押坑道にて約 25 m 探鉱されているが、軟質で比較的良質である。本脈はその南方の知妙院鉱床 3 露頭のいずれに連続するか

不明であるが知妙院鉱床とは別の、これらにはほぼ平行したものであるのが妥当であろう。

6. 結 論

今回調査を実施した 3 鉱床のうちで、唐津谷鉱床はもつとも有望と考えられるもので、今後精査を実施して当鉱床の全貌を明らかにして、かつその品質試験を行う必要がある。

残余の知妙院・経応寺の 2 鉱床は余り将来に期待を持ってないものと考えられる。

知妙院および経応寺の両鉱床は、鉱床の規模小さく、鉱量の算出まで到らないが、唐津谷鉱床は次の如く算出した。

- 1) 海拔標高 75 m 以上を算出した。
- 2) 脈幅 50 ~ 55 m であるが、平均脈幅 52.5 m とした。
- 3) 走向方向断面面積 (平均) は 10,550 m²。
- 4) 比重は 2.5 として計算した。

唐津谷鉱床の鉱量 = $10,550 \times 52.5 \times 2.5 = 1,384,687.5$
 $\approx 1,380,000 \text{ t}$

(昭和 25 年 9 月調査)